シベ語の補助動詞 biXe と「思い出し」

児倉　徳和
(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
koguran@aa.tufs.ac.jp

キーワード：シベ語 (満洲=ツングース諸語)、証拠性、思い出し、意外性 (mirativity)

1. はじめに[1]

本論では、シベ語[2]において動詞述語文の述部に現れる補助動詞 bi- (ある・いる) の一形式 biXe の意味機能を論じる。biXe は以下のように、話し手が聞き手に対し、聞き手が知っているはずの事柄を思い出すよう促す状況や、話し手自身が知っているはずのことを思い出そうとする状況で用いられる。

(1)　(話し手は自分の子供を叱っている)

yeli#bira=de	efse-me	oju=qu	se-me	ale-Xe	**bi-Xe**.
イリ河=DAT	泳ぐ-CVB	なる=IRR.NEG	言う-CVB	告げる-PFV	BI-PFV

＜イリ河で泳いじゃいけないと言ったじゃないか＞

(2)　(話し手は「彼」の名前を思い出そうとしながら)

tere=i　gewe=we　ai　se-Xe　**bi-Xe**.

---

[1] 本論は筆者の博士論文 (児倉 2013b) の一部に加筆修正を加えたものである。本研究の過程では久保智之先生、上山あゆみ先生はじめ多くの方にご指導・ご助言を頂いた。ここに記して御礼申し上げる。また、本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B) 「シベ語の体系的文法と辞書の作成 (研究課題番号 24320079、研究代表者：久保智之)」および若手研究 (B)「記憶領域のモデル化に基づくシベ語文法の研究 (研究課題番号 26770144、研究代表者：児倉徳和)」の支援を受けたものである。併せてここに記して御礼申し上げる。

[2] シベ語は中国・新疆ウイグル自治区で話される満洲＝ツングース諸語の一つである。本論で使用するデータは特に言及がない限り、1943 年生の新疆ウイグル自治区チャプチャルシボ自治県第 4 ニル出身のコンサルタントから得られたものである。本論におけるシベ語の表記は久保ほか (2011) に倣い以下の音素表記を用いる：子音/p, t, c, k, q, b, d, j, g, G, f, s, š, x, χ, ž, m, n, ŋ, N, r, w, y, l/、母音/a, e, i, o, u/。/X/と/K/はそれぞれ/x/と/χ/, /k/と/q/の対立が中和した原音素を表す。また、/’/は有標のアクセントを表す。#は漢語要素の音節境界を表す。

彼=GEN　名前=ACC　何　(と) いう-PFV　ある-PFV

＜彼の名前、何て言ったっけ＞

(1) は平叙文における例である。話し手は以前聞き手である自分の子供に「イリ河では (危ないから) 泳いではいけない」と言って聞かせたことを確信を持つて覚えており、そのことを聞き手である自分の子供に思い出すよう促す発話に biXe が現れている。一方、(2) は疑問文における例である。話し手は「彼」の名前を知っている (聞いたことがある) はずなのに思い出せない、という状況での発話に biXe が現れている。

本論で問題とするのは biXe の意味機能と、文が発話される状況で話し手あるいは聞き手が行う (あるいは行うよう促している) 「思い出し」という心的プロセスとの関係である。そして、特に biXe が平叙文に現れた場合に「聞き手に対する思い出しの促し」という機能を持つことに対し、他の対立する形式の意味機能と矛盾しない、体系的な説明を与えることを目的とする。そして、結論として、発話に際して生起する発話参与者の心内での情報処理のプロセスを斎藤 (2006) に従い適切にモデル化することにより、形式が表す意味を体系的に説明することが可能になることを主張する。

2. シベ語動詞述語文の形態統語論的構造

まず、本論で論じる biXe にシベ語の動詞述語文の形態統語的構造を概観する。シベ語の動詞述語文では主節[3]の述部の主となる動詞は、アスペクト接辞 (-re, -maχe, -Xe) と、義務的ではないがモダリティ小辞 =i をとる。(-maχe については、主節末に現れない。-maχe を含めモダリティ小辞 =i をとらない -re, -maχe, -Xe の形式は連体節や名詞節の述部に現れる。)

表 1　シベ語のアスペクト接辞とモダリティ小辞 =i

モダリティ小辞 / アスペクト接辞	(なし)	=i
非現実 (irrealis)	V-re	V-mi[4]

[3] シベ語において、ある節が主節であるかどうかを明確に判断するのは困難であるが、ここでは連体節 (名詞句の従属部に現れる節)、名詞節 (格をとり、それ自体が名詞的に機能する節)、副詞節 (条件節など典型的な従属節として現れる節) 以外のものとして主節を捉える。シベ語における節の分類については児倉 (2013a) を参照されたい。

[4] -mi は共時的には分析できないが、通時的な観点を考慮すると非現実アスペクトの -re と =i に分析可能であると考えられる。詳細は児倉 (2014) を参照されたい。

現実 (realis)	非完了(的) (imperfective)	(V-maχe)	V-maχe=i
	完了(的) (perfective)	V-Xe	V-Xe=i

以下 (3) から (6) は各形式の例である。

(3) (話し手は一人でドラマを見ている。下手な料理人が中華包丁を手に取った)
Gale=we furu-me aci-**re**.
手=ACC 刻む-CVB AUX-IRR
＜手を切り出すぞ＞

(4) bi cimare tacyqu=de gene-**mi**.
1SG 明日 学校=DAT 行く-IRR.I
＜私は明日学校に行く＞

(5) tewa=de moriN sejeN yawe-**maχe=i**.
そこ=DAT 馬車 走る-IPFV=I
＜あそこを馬車が走っている＞

(6) a. sejeN ji-**Xe**. (久保ほか 2011)
車 来る-PFV
＜車が来た＞
b. sejeN ji-**Xe=i**.
車 来る-PFV=I
＜車が来た＞

また、主節の述部には補助動詞[5]も現れうる。本論では特に bi- (ある・いる) を扱う。補助動詞 bi- 自身はアスペクトに完了の -Xe しかとれない (bi-re, bi-maχe という形式では現れない) という制限があるが、モダリティ小辞の =i をとることは可能である。また、補助動詞 bi- は動詞の未完了形・完了形、および同時副動詞[6]に後続可能である。このことをまとめると、本論で扱う形式は、補助動詞 bi- とモダリティ小辞 =i の組み合わせによる以下の表 2 にあげた 4 つの形式となる。表中カッコで囲んだ形式は、完了アスペクト-Xe の場合の具体的な形式である。

---

[5] 本論では、動詞や名詞・形容詞に後続し、語彙的な意味ではなく専らモダリティを表す動詞のことを補助動詞と呼ぶ。
[6] 同時副動詞 -me は後ろに補助動詞 bi- をとる際に未来や習慣など -re, -mi に相当する意味機能を持つことから、本論では補助動詞 bi- の前に現れる場合に限り、-re, -mi に対応する形式として扱う。

表 2　補助動詞 bi- とモダリティ小辞 =i の組み合わせ

モダリティ小辞 =i 補助動詞 bi-	なし	あり
なし	V-ASP (V-Xe)	V-ASP=i (V-Xe=i)
あり (動詞[7]＋補助動詞 bi-)	**V-ASP biXe** **(V-Xe biXe)**	V-ASP biXe=i (V-Xe biXe=i)

なお、表 2 の 4 形式において、「動詞」の要素に付加されるアスペクト接辞は本論で扱うモダリティには関わらず、専ら文の (命題的) 内容に関わる。例えば、以下でふれるように、補助動詞 bi- の完了形 biXe にモダリティ小辞 =i が後続した形式 biXei は「話し手の発見」を表すが、以下の (7) において biXei が後続する動詞 aymi- (飲む) のアスペクトの差異は話し手の発見の内容にしか関わっておらず、いずれのアスペクトの場合も「話し手の発見」を表すことには変わりがない。

(7)　oi, tere ayrke [aymi-me / aymi-maχe / aymi-Xe] bi-Xe=i
INTJ 3SG 酒 [飲む-CVB / 飲む-IPFV / 飲む-PFV] BI-PFV=I
＜あっ、彼、酒を飲む／飲んでいる／飲んだんだ＞

このことに基づき、本論の以下の議論においても、表中 ASP で表されるアスペクトによる差異は考えずに、専ら補助動詞 bi- (biXe) の有無とモダリティ小辞 =i の有無による 4 つの形式の対立に注目する。

3. 分析の枠組み

本論で扱う biXe について、シベ語の主要な先行研究である李樹蘭ほか (1986) には「話し手が、発生した動作あるいは行為を自ら目撃した、自ら経験した、直接知ったという語気を持ち」、「さらに反問の意味も持つ。」という記述が見られる。以下の(8)から(10)は李ほか (1986) からのものである。biXe は李ほか (1986) の表記では bixə となるなど、筆者が採用する表記と李ほか (1986) の表記は異なる部分があるが、ここではシベ語の表記を本論文のものに置き換えた。また、グロスも筆者が付したものである。

[7] 後でみるように、補助動詞 bi- は名詞・形容詞にも後続可能であるが、名詞・形容詞の場合、それ自体には =i が後続せず、表 2 のような対立をなさないために動詞の場合とは区別する必要がある。このことから本論は専ら bi- が動詞に後続する場合について論じる。

(8) tere moriN yale-me bi-Xe, te an yale=qu o-Xe=i?
3SG 馬 騎乗する-CVB BI-PFV 今 なぜ 跨る=IRR.NEG AUX-PFV=I

＜彼、(昔は) 馬に乗っていただろう？なぜ今乗らなくなったんだ？＞ (李ほか 1986:81)

(9) si joχuN-de yawe-maχe bi-Xe, ane bedere-me ji-Xe=i?
2SG 道-DAT 歩く-IPFV BI-PFV なぜ 戻る-CVB 来る-PFV=I

＜お前、道を歩いていただろう？なぜ戻ってきたんだ？＞ (李ほか 1986:80)

(10) tere ji-Xe bi-Xe, ya-ci yawe-Xe=i?
3SG 来る-PFV BI-PFV どこ-ALL 去る-PFV=I

＜彼、来ただろう？どこへ行ったんだ？＞ (李ほか 1986:81)

本論にかかわるシベ語の先行研究は他にも李樹蘭自身による李樹蘭・仲謙・王慶豊 (1984)、李樹蘭 (1984)、また薩蒙・伊爾罕芝・郭向陽・謝巍 (2011)、Zikmundova (2013)、安成山・郭元児 (2007)、朝克 (2006)、張泰鎬 (2008) が存在する。

これらのうち、李ほか (1984)、李 (1984)、また薩蒙ほか (2011) はいずれの記述も本文で挙げた 2 点について一致している。また Zikmundova (2013) は biXei と biXe の機能を区別していないが、bi- の機能の一部に聞き手に対する思い出しの促しの機能があることは認めている[8]。安ほか (2007) も biXei と biXe の機能を区別せず、「断定・強調のモダリティを持つ」と述べているがこのモダリティが「思い出し」に相当するかは定かでない。朝克 (2006) も bi- を断定の助動詞であるとしているが、安ほか (2007) と同様、断定のモダリティの詳細は定かでない。張泰鎬 (2008) は biXe (および biXei) のモダリティについて特に言及がない。

本論ではこれらの記述を踏まえ、特に李ほか (1986) の記述を取り上げ検討する。

まず李ほか (1986) にある、「話し手が、発生した動作あるいは行為を自ら目撃した、自ら経験した、直接知ったという語気を持ち」という記述であるが、これは証拠性 (evidentiality) に相当すると考えられる。

証拠性は Aikhenvald (2004) によれば、情報源 (source of knowledge) を標示する文法範疇である。典型的なのは Wintu 語のように、五感 (視覚とそれ以外)、推論 (inference)、伝聞 (hearsay) などに区別して情報のソースを標示するというものであるが[9]、五感によるものを直接経験、推論や伝聞

---

[8] Zikmundova (2013:168) には "The perfect verb is used as an auxiliary verb. It expresses an action to which the speaker was a witness, or an action about which he reminds the hearer." とある。

[9] 証拠性の体系の通言語的類型については Aikhenvald (2004:23-66) を参照されたい。

を間接経験として 2 種類に区別して表示する言語も存在し、李ほか (1986) の記述は概ねこの直接経験と間接経験の対立における直接経験に相当すると考えられる。李ほか (1986) は biXe と対立する biXei について、「話し手が、発生した動作あるいは行為を直接知ったとは限らない、あるいは直接知ったことを強調しない」と記述しているが、これは biXe の表す「直接経験」に対する「間接経験」に相当すると考えられる。

次に、biXe が「さらに反問の意味も持つ。」という記述であるが、ここでいう反問の意味機能は、李ほか (1986) の提示している例から、本論で冒頭に示した「思い出しの促し」に相当すると考えられるが、先に示した biXe の持つ直接経験 (ないし証拠性) の意味機能との関係や、どのようにして反問の意味が生じるのかについては明確でない。しかし、ここで注目したいのが、biXei の持つもう一つの意味機能である。李ほか (1986:95) は biXei についてさらに、特に名詞・形容詞の後に用いられた場合に「はっと悟る (恍然而悟) という語気を持つ。」と述べているが、これは mirativity (意外性) に相当すると考えられる。

Mirativity とは DeLancey (2001) によれば話し手の予想外の気持ち (unprepared mind) を表す意味範疇であり、さらに DeLancey (1997) は、トルコ語で証拠性、特に間接経験を表す要素が mirativity を表す場合にも用いられるという現象 (Slobin and Aksu 1982) などから、証拠性、特に間接経験との関係性を指摘している。先に触れたように、Aikhenvald (2004) は、証拠性を専ら情報のソースを表す範疇として定義しているため、mirativity のような直接的に情報のソースとは言えない要素を証拠性の範疇に含めないが[10]、Chafe (1986) のように証拠性を単なる情報のソースだけでなく、一部の知識の照合を含めた情報・知識の心的操作と結びつけて捉え、mirativity をその中に含める立場もある。

シベ語の biXe および biXei の分析を考えると、李ほか (1986) は「直接目撃ないし経験したか否か」という、情報のソースの対立から記述しているが、特に biXei に見られる「はっと悟る」という語気や、biXe に見られる反問の語気について明らかにするためには、少なくとも情報のソースの区別からの分析はこれらの形式の意味機能の対立を説明するのに不十分であり、Chafe (1986) のような、情報の照合も含めた情報・知識の心的操作をも枠組みに取り入れて議論する必要がある。しかし、この時、話し手 (あるいは聞き手を含めた発話参与者) の心内で生起する情報処理のプロセスとしてどのようなものを仮定するかということが問題となる。

文法形式の意味機能をこのような心的プロセスから明らかにする、という立場は Chafe (1986) や Chafe の他の論考 (Chafe1994) だけでなく、田窪 (1989)、Takubo and Kinsui (1997) を始めとした「談話管理理論」によって

---

[10] Aikhenvald (2003) は mirativity の意味機能が多くの場合、本質的に証拠性 (間接経験) やアスペクトを表す要素から拡張されて生じたものであるとしている。

も提案されている。談話管理理論では、発話参与者の記憶領域に D(irect) 領域 (主に直接経験に基づく、検証済みの知識が収納された領域) と I(ndirect) 領域 (主に談話において相手の発話などの間接的なソースから得られた、検証済みでない知識が格納された領域) という 2 つの領域を設け、言語形式の機能をこれら 2 つの領域に存在する要素 (知識) の操作との関係から論じている。さらに、日本語の証拠推量表現「ようだ」と「らしい」を分析した斎藤 (2006) は発話参与者の記憶領域に「知識データベース」と「バッファ」の 2 つの領域を仮定し、知識データベースへの新規要素 (情報) の登録のプロセスを以下の (11) のように仮定している。Chafe (1986) の提案する証拠性の議論の枠組みからいえば、以下のプロセスは他の知識との照合とのプロセスであるともいえる。

(11) ① 外部情報が命題の形でバッファに入力される。
② その命題の但し書き部に情報源が付加される。
③ その命題と関連する命題が知識データベースからバッファに呼び出される。
④ バッファ内の命題が矛盾をきたさないかチェックされる。
⑤ 矛盾が見つかったら、但し書き部を参考にしながら、矛盾の解消がはかられる。
⑥ 矛盾がなければ、新規情報を知識データベースに登録する。

結論から言えば、本論で扱うシベ語の要素は記憶領域 (より正確には齊藤 2006 における知識データベース) への要素の登録の有無 (のみ) にかかわるものである。しかし、その登録に際し、齊藤 (2006) のいうバッファを含めた記憶領域全体で行われる処理のプロセスを斎藤 (2006) の提案する (11) のように仮定することにより、李ほか (1986) の指摘するシベ語の諸形式の意味機能をより体系的に説明可能となる。本論では齊藤 (2006) の仮定する記憶領域への新規要素の登録のプロセスに従い、シベ語の biXe 及びそれに関連する形式の意味を発話参与者の記憶領域で行われる情報処理のプロセスとの関係から体系的に明らかにしたい。

4. モダリティ小辞 =i の表す意味

4.1 =i の持つ「情報伝達」の機能

まずモダリティ小辞 =i が談話において用いられる際の機能を見る。モダリティ小辞 =i は以下のように聞き手に対し情報伝達を意図する状況で許容されるのに対し、=i を持たない文は情報伝達の状況で許容されない。例えば以下の (12) において、(12a) は、話し手と聞き手が共に車が来たのを目撃した状況での発話であり、発話状況からは発話が情報伝達の機能を持つか否かは限定されない。そしてこの状況では =i を伴わない -Xe と =i を伴う -Xe=i がいずれも許容される。これに対し、(12b) のように聞き手が車が来たのを目撃しておらず、また話し手は車に乗るために聞き手に

対し車が来たことを伝える必要がある、という状況を設定すると、=i を伴わない形式 (-Xe) が許容されなくなる。

(12) a. (話し手は友人と 2 人でバスを待っている。友人は話し手の脇にいる)
sejeN [ji-Xe / ji-Xe=i].
車 [来る-PFV / 来る-PFV=I]

＜車が来た＞ cf. (6)

b. (話し手は友人と 2 人でバスを待っているが、友人は脇の店に入っているので車が来たことを告げ、呼び出そうとしている)
oi χoduduN ju, sejeN [??ji-Xe / ji-Xe=i].
INTJ 速く 来る.IMP 車 [来る-PFV / 来る-PFV=I]

＜おい、はやく来い、車が来たぞ＞

また、=i を伴う形式 (-Xe=i) は、典型的には質問に対する応答の文で用いられる。以下(13) のように質問に対する応答の文には =i が必須である。

(13) (息子の部屋に母親 (A) が入ってきて息子 (B) に尋ねる)
A: zo#ye are-me waje-Xe=i na.
<宿題> する-CVB 終わる-PFV=I Q

＜宿題終わった？＞

B: [waje-Xe=i / ??waje-Xe].
[終わる-PFV=I / 終わる-PFV]

＜終わった＞

=i が情報伝達の機能を持つことは、以下の例のように情報伝達を表す ale-「言う (告げる) 」 などの動詞の内容節の述部に =i が必須である (=i のない形式よりも許容度が高い) ことからも示される。

(14) bi tere=de sejeN [ji-Xe=i / ??ji-Xe] seme ale-Xe=i.
私 彼＝DAT 車 [来る-PFV=I / 来る-PFV] COMP 告げる-PFV=I

＜私は彼に「車が来た」と告げた＞

以上のことから、述部に =i を持つ文は情報伝達の機能を持つのに対し、述部に =i を持たない文は情報伝達の機能を持たないことが示される。この述部に =i を持たない文は情報伝達でない状況、例えば詠嘆の状況で好まれる。

(15) bi erai sase baite [icyxya-Xe / ??icyxya-Xe=i]
1SG なんと 馬鹿な こと [行う-PFV / 行う-PFV=I]

＜私はなんと馬鹿なことをしたんだろう＞

(16) tere jaqe jiχa bu=qu da [yawe-Xe / ??yawe-Xe=i]
あの もの 金銭 やる=IRR.NEG すなわち [去る-PFV / 去る-PFV=I]

＜あいつ、金を寄越さずに行きやがった＞

=i を持たない文がこのような状況で用いられることは、情報伝達的でない、感情の表出を表す動詞の内容節に現れることからも示される。

(17) bi erai sase baite [icyxya-Xe / ??icyxya-Xe=i]
1SG なんと 馬鹿な こと [行う-PFV / 行う-PFV=I]

seme qorsu-maχe=i.
COMP 悔やむ-IPFV=I

＜「私はなんと馬鹿なことをしたんだろう」と悔やんでいる＞

(18) tere jaqe jiχa bu=qu da [yawe-Xe / ??yawe-Xe=i]
あの もの 金銭 やる=IRR.NEG すなわち [去る-PFV / 去る-PFV=I]

seme faNce-maχe=i.
COMP 怒る-IMPV=I

＜「あいつ、金を寄越さずに行きやがった」と怒っている＞

4.2 =i の表す発話参与者の記憶領域での処理のプロセス：情報の登録と否定

前節ではモダリティ小辞 =i を持つ文と持たない文を比較し、=i を持つ文が発話された際に情報伝達の機能を持つことを見た。ここで、モダリティ小辞 =i の機能を =i が表す発話参与者の知識状態の変化、という観点から分析したい。

まず、=i を持つ文は情報伝達の機能を持つことから、=i の機能を「聞き手の記憶領域への新規要素の登録」であると仮定する[11]。この時、聞き手の記憶領域で生起する心的プロセスはどのようなものだろうか。(12)から(18)の例は、最終的に聞き手の記憶領域に新規要素が書き込まれることを示唆するものの、その具体的なプロセスについては何も示していない。

ここで、以下のような聞き手の知識の否定する発話を考えたい。=i を持つ文は以下のように聞き手の知識を否定する状況でも必須であり、=i を持たない文は聞き手の知識を否定する文で許容されない。

(19) A: si eba=de ele#ši#ba#χau=de ji-Xe=i ba.
お前 ここ=DAT <28 日>=DAT 来る-PFV=I だろう

＜お前、ここには 28 日に来ただろう？＞

B: waqe, ele#ši#jyu#χau=de [ji-Xe=i / ??ji-Xe].
違う <29 日>=DAT [来る-PFV=I / 来る-PFV]

---

[11] より正確に言えば、話し手は聞き手の記憶領域を操作することは不可能であるため、モダリティ小辞 =i が表すのは「聞き手の記憶領域への新規要素の書き込み」という操作内容のみであり、発話行為により聞き手に対しこの操作を行うことを要求する、と考えるべきであろう。

＜いや、29 日に来た＞

(19)において B が意図する、A の知識の操作は、「(B が) 28 日に来た」という (誤った) 知識を破棄し、代わって B の発話の内容である「(B が) 29 日に来た」という知識を登録する、ということであると考えられる。このことから[12]、=i の表す知識の操作と、そのプロセスは以下のようにまとめられる。

① =i の機能は、「聞き手の記憶領域への新規要素の登録[13]」であり、=i を含む文は談話において情報伝達の機能を持つ。
② =i は聞き手の知識を否定する文に使用されることから、「記憶領域への新規要素の登録」は、「既存の知識との照合」と「矛盾する要素 (の少なくとも一方) の消去」というプロセスを含んでいる。

このように、=i を含む文の処理のプロセスは否定が可能である、ということから部分的には推定が可能であるが、=i を含まない文については、「登録がない」ということのみで、どのようなプロセスで処理されるのかこの段階では検証が不可能である。この問題についてはさらに以下で論じる。

5. 補助動詞 bi- (biXe) の表す意味

前節では、動詞完了形 V-Xe に =i が後続する場合としない場合を比較しつつ、 =i の機能を見た。そして =i が聞き手に対する情報伝達の状況で用いられることを見た。ところで、=i は補助動詞にも後続することが可能である。本節では補助動詞 bi- の完了形 biXe (bi-Xe) と小辞 =i の組み合わせによる形式 biXe / biXe=i の表す心的プロセスについて見る。なお、補助動詞 bi- はアスペクト接辞として専ら -Xe のみをとり、非現実の bi-re/bi-mi や(現実)非完了の bi-maχe/bi-maχei という形式をとらない。このため、本論では補助動詞語幹の bi- とアスペクト接辞 -Xe を分析せず、biXe という一つの形式として扱う。

---

[12] なお、=i による要素の書き込みが必ず消去を含むということは少なくともシベ語の場合は言えない。シベ語の補助動詞 o-, yela- は「既存の要素と新規書き込みする要素に矛盾がある場合に、両方とも消去しないように (内容を改変して) 処理する」、という (有標の) 操作内容を表すと考えられるからである。詳細は児倉 (2013b) を参照されたい。

[13] 本論は専ら =i が平叙文に現れる場合について論じているため、=i の機能を「聞き手の記憶領域への新規要素の登録」としているが、=i が疑問文に現れる場合も含めると、=i の機能は「（話し手・聞き手を特定しない）記憶領域への新規要素の登録」のみであり、話し手・聞き手いずれの記憶領域であるかは平叙文・疑問文という文の形式および発話の状況により決定されると考えられる。詳細は児倉 (2013b) を参照されたい。

5.1 =i と biXe=i の機能的対立

まず、補助動詞 bi- (biXe) に=i が後続した形式 biXei について見る。biXei の特徴として、=i を含むにも拘わらず、聞き手への情報提供の機能を持たないという点が挙げられる。biXei は以下のように =i が許容された、聞き手への情報伝達の状況で許容されない。

(20) (話し手と聞き手は 2 人でバスを待っているが、聞き手は脇の店に入っている)

oi	χoduduN	ju,	sejeN	[ji-Xe=i	/ #ji-Xe	bi-Xe=i].
INTJ	速く	来る.IMP	車	[来る-PFV=I	/ 来る-PFV	BI-PFV=I]

＜おい、はやく来い、車が来たぞ＞ cf. (12b)

さらに、biXei は質問に対する応答の文においても許容されない。コンサルタントによれば、聞き手の質問に対して直接応答していない感じがするという。

(21) (息子の部屋に母親 (A) が入ってきて息子 (B) に尋ねる)

A:	zo#ye	are-me	waje-Xe=i	na.
	<宿題>	する-CVB	終わる-PFV=I	Q

＜宿題終わった？＞

B:	[waje-Xe=i	/ #waje-Xe	bi-Xe=i].
	[終わる-PFV=I	/ 終わる-PFV	BI-PFV=I]

＜終わった＞ cf. (13)

一方、biXei は話し手があることを「発見」した、という状況で用いられる。

(22) (話し手は彼が酒を飲むことに気付いた)

oi,	tere	ayrke	aymi-me	bi-Xe=i
INTJ	3SG	酒	飲む-CVB	BI-PFV=I

＜あっ、彼、酒を飲むんだ＞

李ほか (1986) には、biXei が名詞・形容詞に後続した場合に話し手の発見の語気を表すという言及がある。

(23)

ere	jaqcuru	bi-Xe=i.
これ	第 8 ニル	BI-PFV=I

＜これは第 8 ニルだったのか＞ (李ほか 1986:95)

しかし、(22) のように、名詞・形容詞に限らず動詞に後続した場合でも同様の語気が表されることから、発見の語気は biXei が後続する要素に関わらない、biXei の持つ特徴であるといえる。

先に見たように、=i は「聞き手の記憶領域への要素の登録」を表し、談話において情報伝達の機能を持つ。しかし biXei は =i を含むにも拘わらず、談話において情報伝達の機能を持たないことから、聞き手の記憶領域への要素の登録を表すとは考えられない。=i の意味機能の分析を維持しつつこれを矛盾なく説明するためには、biXei が「話し手にとっての新情報」、つまり話し手 (自身) の記憶領域への新規要素の登録を表す、と考える必要がある。このとき、biXei の表す「発見」の意味機能は、「話し手の記憶領域への要素の登録」という操作を、既に話し手が知っている (＝話し手の記憶領域に存在する) 要素に対して用いることが語用論的に適切ではない[14]、と説明される。

ちなみに biXei には、李ほか (1986) にもあるように、語りにも用いられるという特徴がある。以下の例 (24) は筆者のものである。

(24)

o-Xe=i	o-Xe=i	tutu	o-ci,	**bi**	siN=de	gya-me	**bu-ki**	
AUX-PFV=I	AUX-PFV=I	そう	AUX-COND	1SG	2SG=DAT	得る-CVB	やる-OPT	
se-me	da	**mo**	**sace-re**	**nane**	aliN=de	tawene-me	gene-maqe	
いう-CVB	すると	木	伐る-IRR	人	山=DAT	登る-CVB	行く-CVB	
da	toro	emkeN	tate-me	gya-Xe	**bi-Xe=i**.			
すると	桃	一つ	摘む-CVB	得る-PFV	BI-PFV=I			

＜「いいよ、いいよ、それなら**私が**お前に取ってやろう」というと、**木こり**は山に登って、桃を一つ摘み取ってきた＞

李ほか (1986) はこの現象は指摘しているものの、なぜ間接経験、ないし話し手の発見をあらわす biXei が語りに用いられるのか、語りに用いられた場合の機能が何か、について明らかになっていない。しかし、本論の提案する「biXei が話し手の記憶領域への新規要素の登録を表す」という分析は、語りにおける場合の biXei の意味機能も説明可能である。つまり、biXei は語りの登場人物との対立における話し手 (=語り手) の経験内容 (言い換えれば語り手としての話し手の視点から見た語りの世界) を表すということである。これは (24) において引用節と主節で同一の指示対象 (木こり) にそれぞれ 1 人称と 3 人称という異なる人称が割り当てられていることから示される。

5.2 biXei と biXe の機能的対立

次に補助動詞 bi- (biXe) が =i を伴わない形式 biXe を検討する。冒頭に見たように、biXe は話し手が聞き手に対し、聞き手が知っているはずの事柄を思い出すよう促す状況や、話し手自身が知っているはずのことを思い

---

[14] これは、Grice (1989) の量の公理 (The Maxim of Quantity) の現れであると考えられる。

出そうとする状況で用いられる。

ここまでに見てきた =i と補助動詞 bi- (biXe-) の機能を総合すると、補助動詞 bi- (biXe-) に =i が後続しない形式 biXe の機能は「話し手自身の記憶領域への新規要素の登録がないこと」を表す、ということになる。事実、「話し手の記憶領域への要素の登録」を表すとした biXei は話し手が知らなかった事柄について用いられるのに対し、biXe は話し手が既に知っている事柄に用いられるが、これは biXe の機能からの語用論的推論、つまり、要素の登録の機能を持つ biXei が話し手自身が既に知っている事柄に対しては語用論的に避けられるために、要素の登録がないことを表す biXe が用いられると考えれば、biXe が話し手が既に知っている事柄に用いられることは説明が可能である。

(15) (話し手は顔を見て「彼」が酒を飲んだことに気付いた)

tere	arki	[aymi-Xe	bi-Xe=i	/ ??aymi-Xe	bi-Xe]
3SG	酒	[飲む-PFV	BI-PFV=I	/ 飲む-PFV	BI-PFV]

＜彼、酒を飲んだんだ＞

(16) (話し手は自分の子供を叱っている)

yeli#bira=de	efse-me	oju=qu	seme	ale-Xe	bi-Xe.
イリ河=DAT	泳ぐ-CVB	なる=IRR.NEG	COMP	告げる-PFV	BI-PFV

＜イリ河で泳いじゃいけないと言ったじゃないか＞

しかしここで問題となるのは、biXe と「思い出し」との関係である。biXe の意味機能と、biXe が「思い出し」の状況で用いられるということはどのように関連しているのか、次節ではこの問題を検討したい。

5.3 biXe- の使用から推論可能な発話参与者の知識状態

ここまでは、biXei と biXe がそれぞれ「話し手の記憶領域への登録の有無」を表す、とすることで =i, ゼロ, biXei, biXe の意味機能を体系的に説明することが可能であることを示した。

- =i は記憶領域への新規要素の登録を表し、談話において聞き手への情報伝達の機能を持つ。小辞 =i をとらない形式 (-Xe など) は談話において聞き手への情報伝達の機能を持たず、詠嘆に用いられる。
- =i が補助動詞 bi- (biXe) に後続した形式は「話し手自身の記憶領域への新規要素の登録」を表し、談話において話し手の発見を表したり、語り (narrative) において話し手の視点を導入する機能を持つ。biXei は =i を含むが、聞き手への情報伝達の機能を持たない。
- 補助動詞 bi- (biXe) に =i が後続しない形式 biXe は「話し手自身の記憶領域への新規要素の登録がないこと」を表す。この形式は平叙文の場合、話し手自身が知っており、かつ聞き手も知っていると思っている情報に用いられる。

4.2 節で述べたように、=i を含む文は情報伝達の機能を持ち、また聞き手の知識を否定する機能も持つことから、齊藤 (2006) のモデルのうち、③から⑥のプロセスを経て処理されていると考えられるのに対し、動詞に =i が後続しない文については情報伝達の機能を持たず、聞き手の知識を否定できないという特徴からは少なくとも⑤、⑥のプロセスが存在しないことが分かるのみで、どのようなプロセスを経て処理されているのか特定することができない。

(11)再掲

① 外部情報が命題の形でバッファに入力される。
② その命題の但し書き部に情報源が付加される。
③ その命題と関連する命題が知識データベースからバッファに呼び出される。
④ バッファ内の命題が矛盾をきたさないかチェックされる。
⑤ 矛盾が見つかったら、但し書き部を参考にしながら、矛盾の解消がはかられる。
⑥ 矛盾がなければ、新規情報を知識データベースに登録する。

しかし、3 節で見た、補助動詞 bi- に =i が後続しない biXe の「思い出し」の意味から、=i が後続しない文についても処理のプロセスを想定することが可能である。つまり、biXe は話し手・聞き手両方の記憶領域への新規要素の登録がないことを表すが、biXe が平叙文において持つ「聞き手への思い出しの要求」の機能は、③のプロセスを要求していると考えればよい、ということである。

疑問文の場合 (2) に観察される「話し手自身が知っているはずのことを思い出そうとする」という行為は、話し手自身の記憶領域で生起している③のプロセスに対応すると考えればよい。つまり、「話し手自身が知っているはずのことを思い出そうとする」という行為は、話し手自身の記憶領域からの要素の呼び出しが、うまくいかない (思い出せない) ことによりその試行が行為として表面化したものであるということである。

このように、biXe が用いられる状況で観察される「思い出し」は、小辞 =i と補助動詞 bi- (biXe) の機能の組み合わせという体系性を重視して分析すると、齊藤 (2006) の提案する文処理に伴い行われる心的プロセス (11) における③のプロセスに対応すると考えられる。

なお、この分析に基づけば、3 節で論じた動詞に =i が後続しない文についても③のプロセスが存在することが示唆されるが、動詞に =i が後続しない文のもつ「詠嘆」の意味機能との対応関係は明らかでない。しかし本論の分析は、動詞に =i が後続しない文が形式として表しているのは「記憶領域への要素の登録がない」ということのみであり、詠嘆が特定の心的プロセスと対応するか否かはこの分析に影響しない。むしろ本論の分析は「詠嘆」について心的プロセスの観点から明らかにする可能性を持っているといえるが、詳細な検討は今後の課題である。

6. 結論

本論ではシベ語の補助動詞 bi- の一形式 biXe の使用と「思い出し」という心的プロセスの関係を論じた。本論の結論は以下の通りにまとめられる。

1. シベ語の biXe が形式として表す意味は以下の通りである。
   a. 補助動詞 bi- (bi-Xe-) は話し手の記憶領域に対する操作の標識である。
   b. モダリティ小辞 =i は記憶領域に対する要素の登録の標識であり、=i のない形式は記憶領域に対する要素の登録がないことを表す。

以上から、biXe は「話し手の記憶領域に対する情報の登録がない」ことを表す。また、本論で見た biXe に関連する諸形式の意味は以下表 3 のようにまとめられる。

表 3　補助動詞 bi- とモダリティ小辞 =i の組み合わせとその機能

	(なし)	=i
動詞	V-ASP (詠嘆) 聞き手の記憶領域への新規要素の登録(の要求)なし	V-ASP=i (情報伝達) 聞き手の記憶領域への新規要素の登録(の要求)
動詞＋補助動詞 bi-	V-ASP biXe (思い出し) 話し手自身の記憶領域への新規要素の登録なし	V-ASP biXe=i (発見) 話し手自身の記憶領域への新規要素の登録

2. 1. で示した記憶領域への要素の登録は齊藤 (2006) の提案する以下のプロセスを経て行われると仮定することにより矛盾なく体系的に説明される。

① 外部情報が命題の形でバッファに入力される。
② その命題の但し書き部に情報源が付加される。
③ その命題と関連する命題が知識データベースからバッファに呼び出される。
④ バッファ内の命題が矛盾をきたさないかチェックされる。
⑤ 矛盾が見つかったら、但し書き部を参考にしながら、矛盾の解消がはかられる。
⑥ 矛盾がなければ、新規情報を知識データベースに登録する。

このうち、=i があらわす記憶領域への要素の登録は、=i の文が聞き手の知識を否定できることから、③から⑥の既存の要素の読み出しと照合と矛盾する知識の一方を削除するというプロセスを含むことが示される。本論で論じた biXe の使用に関わる「思い出し」は、biXe の使用に伴って話し手の記憶領域で生起している情報処理の心的プロセスが観察可能になったものである。

本論で示したのは、文の処理の心的プロセスのモデル化により、シベ語の諸述語形式の意味を体系的に明らかに示すことができる、ということで

ある。このように適切なモデル化と、体系性を重視した分析により言語形式を基にした文の意味的処理のプロセスが明らかにしうる。さらに本論の分析は、言語形式を手掛かりにして言語主体の記憶領域で生起する情報操作のプロセスの議論にも還元しうる。本論で扱った 齊藤 (2006) を始めとする一連の論考以外にも Chafe (1994) や Lambrecht (1994) など、情報操作の心的プロセスについて論じた論考は少なくない。これらの先行研究はそれぞれ発話内のポーズの時間長や文単位のプロソディを心的プロセスとの対応関係から論じているが、本論は分節的形式の意味機能をもとに言語形式と心的プロセスを論じた点に特徴があると言える。

略語一覧

1　1 人称
2　2 人称
3　3 人称
SG　単数 (singular)
PL　複数 (plural)

DAT　与格 (dative)
ACC　対格 (accusative)
ALL　向格 (allative)

ASP　アスペクト (aspect)
IRR　非現実 (irrealis)
IPFV　非完了(的) (realis imperfective)
PFV　完了(的) (perfective)
NEG　否定 (negative, negation)
CVB　副動詞 (converb)
OPT　希求 (optative)
IMP　命令 (imperative)

COMP 補文標識 (complimentizer)
INTJ　間投詞 (interjection)
Q　疑問標識 (question marker)
AUX　補助動詞 (bi-を除く)
BI　補助動詞 bi-
I　モダリティ小辞 =i

参考文献

Aikhenvald, Alexandra, Y. (2003) Evidentiality in typological perspective, In. Aikhenvald, Alexandra, Dixon, R.M.W. (Eds.), *Studies in Evidentiality*. 1-31. Amsterdam: John Benjamins publishing company.

———— (2004) *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.

安成山・郭元児 (2007)『錫伯語満語口語基礎』烏魯木斉 : 新疆人民出版社.

Chafe, Wallace. (1986) Evidentiality in English conversation and academic writing. In. Chafe, Wallace, Nichols, Johanna (eds.) *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*, 261-272. Norwood, New Jersey : Ablex Publishing. Corporation.

———— (1994) Discourse, Conciousness and Time. Chicago: The University of Chicago Press.

朝克 (2006)『現代錫伯語口語研究』北京：民族出版社.

DeLancey, Scott (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics*. 33(3): 369-382.

Grice, Paul, H. (1989) *Studies in the way of words*. Cambridge: Harvard

University Press.
児倉徳和 (2013a)「シベ語の三つの動詞完了形 -Xei, -Xeŋe, -Xe の機能と節の階層：なぜ -Xe のみが連体用法を持つのか？」『北方言語研究』3：155-174．北海道大学大学院文学研究科．
———— (2013b)「シベ語のアスペクト　・モダリティの研究—知識状態の変化にもとづく体系化—」東京大学大学院人文社会系研究科博士論文．
———— (2014)「シベ語の動詞接尾辞 -mi, -Xei とツングース諸語における述語人称標示」日本言語学会第149回大会予稿集. 日本言語学会.
久保智之・児倉徳和・庄声 (2011a)『2011 年度言語研修テキスト 1　シベ語の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
Lambrecht, Knud. (1994) *Information structure and sentence form: topic, focus, and the mental representations of discourse referents*. New York: Cambridge University Press.
李樹蘭 (1984)「錫伯語動詞陳述式的親知口気和親知口気」『民族語文』第6期．26-32.
李樹蘭・仲謙・王慶豊 (1984)『錫伯語口語研究』北京：民族出版社.
李樹蘭・仲謙 (1986)『錫伯語簡誌』北京：民族出版社.
齊藤学 (2006)「自然言語の証拠推量表現と知識管理」博士論文, 九州大学.
薩蒙，伊爾罕芝，郭向陽，謝巍 (2011)『錫伯語通論』烏魯木斉：新疆人民出版社.
Slobin, Dan, I, Aksu, Ayhan, A. (1982). Tense, aspect and modality in the use of the Turkish evidential. In. Hopper, Paul, J. (ed.), *Tense-aspect: Between semantics & pragmatics*. 185-199. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
田窪行則 (1989)「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志 (編)『日本語のモダリティ』211‐234．東京：くろしお出版.
Takubo, Yukinori, Kinsui, Satoshi. (1997) Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of Pragmatics*. 28: 741-758.
張泰鎬 (2008)『錫伯語語法研究』昆明：雲南民族出版社.
Zikmundová, Veronika. (2013) *Spoken Sibe - Morphology of the Inflected Parts of speech*. Prague: Karolinum Press.

The Auxiliary *biXe* in Sibe and "recalling" as a mental process

Norikazu Kogura
(Research institute for the language and cultures of Asia and Africa)

This paper provides a structural analysis for the function of *biXe* in Sibe, in relation to the meaning of "recalling," which *biXe* has in discourse. The main arguments of the paper are as follows.

i) In morphological terms, biXe can be analyzed into the perfective of auxiliary *bi-* (be, exist), not taking the modal particle *=i*. The functional meaning of *biXe* is accounted for by the function of auxiliary bi- (which always appears as the perfective *biXe*) and the modal particle *=i*:
   a) Auxiliary *bi-* (or its perfective form *biXe*) denotes the management of the memory domain of the speakers themselves.
   b) Modal particle *=i* denotes "the registration of new information into the memory domains of interlocutors." Clauses that do not contain *=i* denote not registering any (new) information into the memory domain of interlocutors.

From a) and b) above, the function of *biXe* is analyzed as denoting no registration of (new) information into the memory domain of the speakers themselves. The table below shows the functions of four forms in relation to the auxiliary *bi-* and modal particle *=i*, and their meanings attested in the discourse.

Table. Auxiliary *bi-* and modal particle *=i*: their form and function

	No modal particles	Modal particle *=i*
No auxiliaries	**V-ASP** (ADMIRATION) No (direction for) registration of new information into the hearer's memory domain	**V-ASP=*i*** (INFORMATIVE) (Direction for) registration of new information into the hearer's memory domain
Auxiliary *bi-*	**V-ASP *biXe*** (RECALLING) No registration of new information into the speaker's own memory domain	**V-ASP *biXe=i*** (MIRATIVITY) Registration of new information into the speaker's own memory domain

ii) Registering (new) information denoted by *=i* includes the processes of the read out of related information that is already in the memory domain, and matching the new information and the information that has been read out

iii) Read out of related information is also supposed to occur in the processing of sentences that do not contain *=i*, and the meaning of "recalling" as attested in *biXe* is supposed to be the manifestation of this process.